

近藤宗平先生とホルミシス研究

もと国立がんセンター放射線研究部 田ノ岡 宏

近藤宗平先生は、寺田寅彦の言葉を引用して「放射線を怖がりすぎるのも怖がらなさすぎるのもよくない。正しく怖がることが大切である」とよく言っておられた。今のわが国の状況は、放射線を怖がりすぎて心理的にも経済的にも過剰な負担を国民が負わされているように見える。この根底にはわが国の原爆経験の影響が強く尾をひいているようにみえるが、近藤先生は原爆人体被害の大部分は熱線によるものであって、放射線の影響はそのごく一部に過ぎないことを強調しておられた。

近藤先生は、放射線に対する過剰な心配をなくするためのひとつの説得力としてホルミシス現象をとりあげ、これに対する科学的説明を試みられた。日本放射線影響学会にホルミシス研究会を立ち上げ、毎年の大会には分科集会が行われてこの方面の活発な討論がなされてきた。この会は会長だった長崎大学奥村寛教授の御病氣、御逝去のあと現在休止しているが、低線量放射線影響というテーマで存続して、毎年ホルミシス関連の研究発表が続けられている。

近藤先生が最後に国際集会に出席されたのは、アメリカワシントン州リッチランドで行われた **Conference on Biological Consequences and Health Risks of Low-Level Exposure to Ionizing Radiation** (2010 年 5 月、Feinendegen 教授主催) で、ここで **Hormetic Effects on Human Cancer Mortality are Inducible only after Long-Term Irradiation at Low Dose Rates** という発表をされた。その心はホルミシス効果を放射線量の関数として定量的に表すことであった。国内の学会では日本放射線影響学会第 55 回大会 (2010 年 9 月、仙台) の福本学大会長招待特別講演で「低線量放射線健康影響の総括-ホルミシス研究-」と題して話されたのが最後であった。この時ご健康状態は十分とはいえなかったが、無理を押して仙台へ行かれ、芭蕉の「閑さや、岩にしみ入る蟬の声」という一枚のスライドを示された。聴いている方には、まるで禅問答のようだったのでいろいろの受け止め方があったが、私は放射線の線量を測るだけでなくその意味するところを深く考えよという風に受け止めた。ここでは近藤先生の足跡をホルミシス研究という面から辿ってみたい。